．アオゾラナイタ。

優宮♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

・アオゾラナイタ。

【Ｎコード】

Ｎ７３６３Ｖ

【作者名】

優宮♪

【あらすじ】

早紀（さき）、香（かおり）、銀士（ぎんし）はこの世、日本では差別の目で見られていた。

いじめ、偏見に負けないでずっとずっと頑張った３人の物語。

プロローグ

空から雫が流れ出す。
いくつもの雫が流れていた。
アオゾラがナイタ…

早紀、君がいない世界はとても寂しくて切ない。
とても青くて、美しいと感じていた空も、今は何も感じない。強いて言うなら黒と白の世界。何も感じないなんて可笑しいよな。

佐織　早紀　男の子、君は１６歳でこの世を去った…
君がこちらの世界に来いと言うのであれば、俺はいつでも行くであろう。
愛した君がいないのであればこんな世界から何時(いつ)過ぎ去っても後悔はしない。

早紀君。幼なじみで私のよき理解者の早紀君がいなくなって６ヶ月、半年が過ぎました。
寂しいです。
多分、城田くんの方が悲しいと思うけど、私も人のことが言えないくらいとても悲しいです。
生まれ変わって、私達のところへ戻ってきてください。

城田(しろた)　銀士(ぎんし)　男の子、１６歳、４月６日が誕生日。早紀とは色々あった。

瀬島(せじま)　香(かおり)　女の子、１５歳、６月１７日が誕生日。早紀の幼なじみ

01　「教科書貸して♪」

「早紀！」
「ん？どうしたの？」
「教科書貸してください！」
「はい。どうせ、社会でしょ？」
「おお！早紀！流石！天才！」
「んなことないって」

だって、俺は銀士の時間割を覚えたから。このくらいできる。君の予定くらいさっさと覚えられる。
「そうそう、瀬島ってぃから伝言『ＰＣ部の中島が帰ったから塩谷に伝えろ』って～」
「おｋ！」

桜舞い散る春の日はぽかぽか陽気で、とっても気持ちがいい。

はじめまして、佐織　早紀です。１５歳です。

ここ私立桜ヶ丘高校１年３組はけっこう平和です。
まぁ、差別が半端なくひどいですが、なんとか俺は差別を受けずに平和に高校生活をＥｎｊｏｙしています！
それでも、俺には秘密があります。差別どころじゃない…絶対いじめが起こっていじめを受けなきゃいけない多分、それは盛大になるだろう。

「早紀じゃああれ・・・一緒に帰ろうか。今日休みだろ？部活」
「おっいいなそれ！行く行く！」

はい、俺の話している相手「銀士」が俺の恋人です。

つまり。俺らは絶対にいけない恋をしている、男同士の恋、同性愛だからだ。

馬鹿馬鹿しいよな、でも愛しているんだ。君が愛しい。

最高に君が好きだよ？

02　「佐織　早紀」？

「佐織さん」そう先生に呼ばれてしまった。
「先生。俺、男です、佐織　早紀です。」
「あぁ、ごめん。沙織君」

この先生は「進藤　結城（ゆうき）」女子に人気があって教え方もいい。歳は２６歳だっけ？結構若い。最終的に女子には「進藤先生に告白したら・・・」となるほど。はい、どーでもいい。

「あ～沙織君いいなぁ・・・進藤先生と話してる」っと小声で話している。
「でもさぁ～・・・佐織君ってやばくない？」

「あのこだよね？」
「ってかアイツ。」

何故か鳥肌が・・・（汗）
「銀士！俺ちょっと教室に忘れ物したから行ってくる！」
「え？・・・大丈夫か？あんときも」
「・・・平気。もう高校だよ？そんなガキなことしねーってバーカ」

ごめんなさい。
泣きたいくらいに怖くって、震えるくらいに怖くって何もできない。
でも、なんとなく分かる。
卑怯な手を使うことくらい。しかも先生に気づかれないような方

法で・・・

ガラ・・・と戸を開ける。すると何人かの女子がいた、しかも午後の小声で話していた女子だ。

「どうしたの？」

「忘れ物。ごめんね？えっと、大橋と一緒にはなしていたんだろ？」

大橋　真菜穂（まなほ）は俺と同じ中学校にいた、そして俺をいじめた少女だ。

「・・・」鋭い睨み。

この日から俺の地獄が始まった。

03　いじめの始まり

おはよう御座います。佐織です。ただいま俺は・・・

いじめを受けています！

それは、小学校のガキがやるようないじめだった。

「靴隠し」職員室に行って全力で探してもらって見つかる。ゴミ箱で

「教科書の落書き」1時間づつ銀士に借りました。あいつ置き勉だから・・・

でも、中学校時代にも俺はいじめにあっていた。（はなしたっけ？）

「言葉の暴力」もあった。

「力の暴力」はひどかった。殴られて、蹴られて、暴言を吐かれた。

苦しい。でもこんなことといえない。

「早紀君。大丈夫？」

「香・・・」

はい、幼なじみの1人目。

「今回は私と銀士も守るよ、あと・・・」

「杏林（きょうりん）　東間（とうま）です。中学校のときのことは聞いたよ。大丈夫！仲間だよ！」

「早紀！秘密を作らない！」

このとき、俺は初めて人のつながりを学んだ。

初めて暖かさを学んだ。

いじめは何にもうまない。

これから地獄の日々を楽しもう

04　past

苦しい、息が詰まりそう・・・

過去の記憶が苦しめさせるのは現実だった。

「早紀くんってさぁ男が好きなんでしょ？うわー銀士君可愛そう！真菜穂って言う彼女がいるのに」

そんなの昔から知ってる。

真菜穂、ごめんな？

銀士ごめんな？

このとき早紀は１４歳、中学２年生。

ただいま絶賛いじめられています。

理由は恋です。

「佐織くん」

そう言ってよってきたのは「米澤　修治」学校内で一番変態で、可愛いものならば男でも女でも抱いてしまう変態君です。

「きみさぁ・・・銀士のことが好きなんだろ？何も言わない、ちょっと来いよ。」

あの時、もう俺はいじめられていた、だけど、すっごい優しい声をかけてくれたのが嬉しかった。

何も知らない無垢だったとき、俺は怖かったんだ。

だから、米澤の言いなりになっていた。

「早紀」

そう甘い声で言われた。

過去は消えない。
俺の背中には痣がある。

過去のいじめで受けた傷は深く。

呼吸ができないほどにひどかった。

「銀士、ごめん」

05　past2

イヤだ！

声が出ない、苦しい。助けて…

この記憶を最後に、俺、佐織早紀は記憶をとざした。

俺が目を覚ましたのは病院の中、クリーム色の壁の中から香るのは消毒などのにおいとフルーツなどの甘い香・・・

「早紀君！」

香だった。心配そうに俺の顔を見つめている。

「大丈夫？ごめんね…いじめられてるなんて分からなくて…」

「かお、り…泣かないで。大丈夫だから、心配し、てくれ、て、ありがとう。」

言葉を話すのはとっても難しくって、声が出ない。

「早紀。」

見ると、銀士がいた。

「ごめん。」

「いいよ」

冷たい声から出される会話は寂しかった。

「好きだよ。早紀。」

「うん。ありがとう、俺もだよ…」

「はわわわ…病院でいちゃいちゃ禁止だよ？」

こう言いつつ、俺のいじめは続いてた。

でも、真菜穂と別れたころから徐々に薄れて、今はもう、関係な

くなっていたはずだった。

いじめのループは終わらない。

「早紀君！」

どかっ

「うわぁ！…」

「ださーーい！きゃはははは」

笑う女子。

ごめんなさい。

でも、俺には戦ってくれている仲間がいる。

このとき、アオゾラは晴れて、笑っているように見えた…

06　大橋　真菜穂

「あぁ…カッコい～」

そう私は銀士を見て言った。陸上部のエースで、高身長で…顔が整っていて…カッコいいです！

「まーちゃん本当に銀士君好きだよね～頭の悪さは私よりも上だしね。」

「えぇ！あのカッコよさが分からないの？ありえない！中学校のときは男子からも女子からもラブレターを貰ってて、先輩、後輩関係なしにだよ？あぁ・・・カッコいい」

でも、真菜穂（私）は壊れてしまった。

銀士が私と別れてから早紀って言う男と付き合い始めた。

しかも、私と銀士などの中学校のときにいじめていた子と。

『悔しい。』

私の何が分かるの？

私と何で別れてあの佐織　早紀と付き合うの！！！

そんな銀士は銀士じゃない！

私の銀士を返して！素直じゃないけど、私のことを思ってくれて、優しい銀士を返して…

あんな奴いらない！

佐織　早紀なんかいらない！

この世の存在に必要としないの！！

ねぇ…銀士、私を見て、私だけを見ていて、この大橋　真菜穂だけでいい。

分かってくれる？お願い…

私を愛して。

07　流れる星

「皆に話があるんだけど！」
俺、城田（しろた）　銀士（ぎんし）はグループの皆に声をかけた。

「何？」
紹介が遅れたけど、白波（しらなみ）　海斗（かいと）。俺の親友兼よき理解者。
杏林　東間　一応女の子、柔道、空手、ショーリンケンポーとか言う格闘技を何か習っててクソ強い。桜ヶ丘高校で1年生エース。神さんかよ（笑）
瀬島　香　早紀の幼なじみ、このグループの中ではお母さんに似ているな。海斗と同じよき理解者。
そして、佐織　早紀。俺の恋人デス。（照）

「今日な、10年に一度来る流星群が見れるんだって！それを夏のレポートにしねぇか？」
「うわ～ガキクセー…あれだろ？理科の。」
「それ！5人グループで作るから！クラス違ってもいいし！いいだろ？」

「賛成！銀士なかなかやるじゃん！」
「とーまは分かってくれたな！」
「えっと私もいいの？」
「もちろん！」
「一応賛成。」
「おっしゃ！…早紀は？」
ガキくさくてちょっと面白いが、早紀は夜が怖いらしい。
「…皆が行くなら行く。」
「行くから言ってるんじゃん！よし、クラブ終わったら大井舞（おおいまい）公

園集合！遅れんなよ？集合は７：３０でいいな？」

「おｋ！」

大井舞は学校から徒歩１０分の公園で、結構でかい。

でも、知らなかった。

こんなことするんじゃなかったと過去の自分を恨む俺がいた。

08　大きな空

ドサッ

そう聞こえた気がした。静かな大井舞公園（おおいまいこうえん）の中で…
少し薄暗い夜明けの空に赤い液体が飛び散る。

「きゃあああああっ」
香の悲鳴が耳の奥で聞こえる。すごく危ない気がする。ダメだ…逃げて…

「早紀！起きろ！死ぬな！早紀！」
海斗と銀士が必死に俺を起こそうとする。
ごめん、こんな不謹慎なのにな。幸せなんだよ、香も杏林も海斗も銀士も心配してくれている…

「…ぎん、しかい、と、かおり、きょうり、ん、あり、が、と…」

こんなことになったのも俺の不注意だよ…お前らのせいじゃない

「うわぁ～…」
「綺麗。すっごい。」
流星群が輝きながら目の前を通る。
「…みんな幸せになりますように」

こうお願いした。
お願いって高校生の男子がやることじゃないけどな…

真菜穂ｓｉｄｅ

銀士が星を見て「綺麗」と呟くなら私も思うわ、とても綺麗だと…
あなたが願うなら私も願うわ？「貴方が欲しい」と。
ダメなのかしら…こんなにも私が貴方を思っているのに。何故？
言ってくれたよね？あの時、確かに言ってくれたよね？「真菜穂といるよ。愛してる」って…
あいつが憎い。佐織　早紀…あいつがいなければ私といてくれたわよね？

殺したら一緒に入れる？
愛してくれる？
笑ってくれる？

早紀ｓｉｄｅ

おかしいな…身体が熱い。
おなかが痛い、刺されたような鋭い痛み（いた）。

叫んでる。
香が……

杏林が……

海斗が……

銀士が……

心配してくれている、皆が、助けてと叫ぶ。

真菜穂が見える。ずっと銀士をみてる。「銀士…これで愛してくれる？」

聞こえる。

大きな空がとても綺麗に見える。

君の顔を見て安心したんだ

笑って？

俺は意識を失った。

09　目覚めてほしい

早紀が真菜穂に刺されてから1週間、いっこうに目を覚まさない。

白い肌にうっすら見える傷跡が生々しくみえる。

腹部にある傷跡は少し残る。

「精神的なショックで目覚めないんでしょうね。毎日話してあげれば戻ってくると思いますよ」

あの日から俺らは病院に通っている。

俺ら個人の部活が全国大会に行くこと。

先生ができちゃった結婚したこと。

早紀の部活（茶道サークル）が廃部なりかけで大変なこと。

香が学年1位の成績だったこと。

その他いっぱい話しかけた。

そして、最後にはなすのは「戻って来い、早紀。」

「やっほ…早紀。元気か？」

そう話しかけてみるが返事はない。

「…佐織くんどうかい？」

隣の部屋のおばさんだ、優しそうな顔をしていてフレンドリーだ。

「まだ寝てます。」

「そう、早く起きなさいよ？城田くんが待ってるよ～」

早紀は愛されてるんだ。

俺はそう感じている。

そのとき、早紀の腕がぴく…と動いた気がした

10　早紀

ぴくっ…と動いた気がした。

「早紀？」

「う…」

その頃俺は不思議な夢を見ていた。

中学のときの制服を着てクラスで笑っている俺がいる、真菜穂も銀士も海斗も香も優しくて、それ以上にクラスの人気者となっている俺がいた。

「早紀！」

「さおりん♪」

そう呼ぶ声…

「俺、いじめられてないんだ」

「何言ってんだよ！それありえないから～早紀ホント抜けてるよね！」

「あっ…うんごめん。夢を見てたみたいw」

夢なんだよ、あっちがいじめられていた方が夢だったんだよ、そういう落ちなんだって、夢、夢なんだって。

夢

ゆめ

ユメ？

違う、こちらが夢なんだ。こんなに暗くって怖いって思う空じゃない。

「早紀」
呼ばれた方を見た。
中学に入る前にこの世を去った幼なじみの慎也だ。
「慎也？」
「そ、いいか？早紀、俺と一緒にいないか？」
耳を疑った。
早紀、俺と一緒にいないか？この言葉の意味が分からない。
「俺とずっと一緒にいよう、嘘や偽りの世界にいるより、笑いの絶えることのない花の香のするこの世にいないか？早紀が来てくれると俺も嬉しいし、何よりももっといつまでも笑っていられる。あの世でいつ忘れられてもいいのか？永遠に忘れられないこの世で一緒にいよう」
慎也は寂しかったんだ。
でも、俺は…
「早紀」そう言ってくれる仲間がいる。
「ごめん、いつか行くよ。必ず、遅くはならない。」
「今はあっちにいるよ。慎也も忘れない。だから、帰るよ。」
言った瞬間に目が覚めた。
ボゥ…っとする。
白を基調とした部屋には甘いにおいもしている。
シトラスのにおいもする、懐かしくってすぐ分かった。

ワックスで立てた髪の毛が懐かしい。
「ぎ、んし、だ」
「…！早紀…お前」

そう言われた。

あの日のようにキスをする。

でも、この日から俺は病気にも弱くなった。

精神も

俺はでも、決めたんだ、導火線を燃やして進む、慎也の分まで

１１　君のいる時間

久しぶりだった。早紀の墓に来るのは…

寒い冬空にちらほら雪が舞い始めて早紀の墓のにもうっすらと積もっているのが分かる。

君が死んだのは、体育祭が終わってから４週間後くらいだった。

１０月４日…

いいや、違う、本当の早紀は９月にいなくなっている。

早紀でも早紀じゃなかったんだ…

「早紀、お前何にでるの？」

「何って？」

「体育祭！１００ｍ走だったよな？」

「え…あぁ、俺は走れないから。もう…」

「はぁ？」

聞き間違えたんだよな？そうだろ？走れない？意味分からない。

「先生に宣告された、あと長くて２ヶ月生きられるかどうか。」
「マジで？」
「まじ、無理な運動、もちろん長い間外に出る体育祭は禁止。桜祭なんて生きてるかも分からない。悔しいよ、もっといっぱい皆とここにいたい。神様は何で俺を選んだんだよ…」

泣き始めてしまう早紀。
「いなくならないから。
ずっと一緒だ。
どんなに離れていてもずっと、永遠にボケても一番最後まで死ぬまでお前を忘れない！」

泣きやめよ。

早紀。

「お前が好きだ。」

ないはずの桜が見えた気がした。

別れを悔やまない惜しまない。

一緒にいるから…

最後まで。

12　愛してる

早紀はどんどん弱くなっていった。

もう、文字を書いたりするのもとてもゆっくりだった。
もう、しゃべっても笑うことが疲れるみたいだ。
もう、手を握っても握り返すのが精一杯だ。

もう、歩けないかもしれない。

もう、しゃべれないかもしれない。

もう、記憶がなくなるかもしれない。

「銀士、どうしたの？」
ずいぶんと弱い声で名前を呼ぶ。

「何もない。」

消えそうな命のともし火は燃える、燃え続ける。

「ねぇ、もう、疲れた…」
「朝なのに？」
「…でももう、疲れた。」

日に日に悪くなる症状。

「この命、銀士が終わらせてくれない？」

「何で？」

少し肌寒くなってカーディガンを着始める今。
木枯らしが聞こえなかった。

「もう、時間がない。最後は銀士といたい。明日、病院に入院することになってる。多分、夜中は生と死の境目になっちゃうくらい。だから、お願い。人工呼吸器なんて1週間でつけてしまうよ…お願い。終わらせて…」

そう言われた。

悲しい、イヤだ。

ごめん、最後まで、大好きだから。一生忘れない。

早紀、そう言ってくれてありがとう。

俺も、好きだから。

１３　最後ノ時

雨が降りそうな真っ黒な雲が空を覆う。
今日から早紀は入院する。
手術不可能な早紀は死を待つのみ。

俺はクラブを終えて香、東間、海斗と早紀に会いに行く、静かな部屋に持っていくのは皆からの「寄せ書き」だった。真菜穂も早紀の最後が近いことを知るとすばやいが書いてくれた。
部屋は２０２号室。前に入院したときもこの部屋だった。
「よっ」
「…みんな」
「えっと…これ、皆からの寄せ書きです。早紀君のために皆が書いたんです！」
香が言う。
「真菜穂も書いてるよ！すっごいびっくりした！」
子供みたいな説明で言う東間は本当にびっくりしている。
「大丈夫、毎日は難しいかもしれないけど、ちゃんと１人はこれるようにしているから！土日は午後に４人で来るから！」
海斗が長文を言うのは珍しい。でも、心配しているのがよく分かる。

「皆に話すよ」
静かになる。

「約束してくれる？」

話し終わると約束する。
「するに決まってるじゃん。何言ってるの！」
「そうだよ！水臭いなぁ～～」
「バ～カ！しないやつはシメル！」
「…ありがとう。」

最後に一緒にいたときだった。

最後ノ約束守ッテミセル。

１４　青空

空が青い。
静かに舞う小鳥達が朝を告げる。

「おはよう」
そんなメールが来た。
送信者は「銀士」

誰？

わかんない。

何でここにいるんだろう。
点滴が腕にある。多分病気なんだろう。なんだか怖い。

「佐織さーん点滴変えますよー」
看護婦さんの優しい声で世界は変わる。
「お姉さん、銀士って人知ってます」
するとお姉さんは知ってるんだろう、残酷な天使を見るように俺を見る。
「学校のお友達みたいですよ～佐織さんが寝てるときにいっつも来てて「あ…また寝てる」って言いますから」
「へぇ…」
嘘だろう。
目線が泳いでいた。

その日、その会話を堺に佐織　早紀と言う人間はいなくなった。
誕生日の昨日を堺に死の世界を歩む。

告別式もすべて何もかも雨であった。

青空の中での雨

「青空が泣いている」

そう、泣いた。

1つ言い残したことがある。
銀士、香、東間、海斗。

ごめん。

んで。

ありがとう。

15　あおぞらないた…

君がいなくなって5年と言う月日が流れた。

俺は、約束を守れたんだと思いたい。

守れてるよな？

あの寒空に恋をして、冷たいくらいに最悪な恋の仕方だよな。いじめても君は俺を愛してくれた。

最悪だよな。最後まで君を守れなかった。

あの日の涙はつらかった。

きみがいじめられていると知った日。全校生徒を殴りかかろうかと思ってしまった俺がいることを覚えているかい？あれは思い出してみるととても恥ずかしいな、でも、早紀。君をそれほど愛していたのには変わりは無いのだから。

「恥ず」

俺の側には彼女がいる。どことなく早紀に似ているんだ。

でも、早紀がいたときほどには負けるよ。

君が一番好きだったのだから、それはもう、一生変わりないだろう。

「……早紀。久しぶり」

久しく来ていなかったのを思い出す。俺の花が枯れている。

「早紀、愛してる。ありがとう、ごめん」

伝えられたよな。この思い。

あとがき

いままで読んでくださった方にお礼申し上げます。

初めてＢＬを書いた．アオゾラナイタ。はずっとずっと書いてみたかった話しでした。

本来もう少し続きの話を書きたかったのですが、これ以上かいてしまうと、銀士のイメージや香、東間、海斗、真菜穂などの存在がひどく忘れ去られる結果になるのが怖かったので終わらせていただきました。

そして、私自身の問題により．アオゾラナイタ。を終わらすことになりました。

また、ゆっくりしたペースでは御座いますが．アオゾラナイタ。の次の作品を書かせていただこうと思っております。

また、読んでいただけることを信じて。

優宮♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7363v/

．アオゾラナイタ。

2011年10月8日23時32分発行